

「ガリツ、ガリツ」。先端

がかき状の鎌を幹に押し当て、力を込めて水平に引くと、白い軌跡からじわじわと樹液があふれ出した。10月、少し肌寒くなった大子町の山林で、大子漆の保全に取り組むNPO法人「麗潤館」（矢崎孝子理事長）が主催した漆掻き体験に参加した。

木の幹に小さな傷をつけ、植物の生理作用で集まる樹液を「頂く」。デリケートな作業に、「なんか痛そう…」と記者が躊躇していると、「手早くや



らないと、大事な滴が落ちてしまふ」とこの道60年、大子漆保存会の飛田祐造会長がびしゃり。

1本の木から取れる漆の量は掻き手の技術に大きく左右され、初心者では100gに満たないが、熟練者では倍以上にもなる。天候や湿度によっても量や質が変わるといい、自然との対話が必要とされるなんとも奥深い作業だ。

「体験型」県北振興の鍵に

大子で漆掻き

江戸時代、水戸2代藩主の徳川光圀が植栽を奨励したとされる大子漆。上質で輪島塗などの高級漆器に使われてきたが、明治以降は安価な輸入品の台頭で衰退し、職人の技術継承も課題となっている。

取材では、数年前に漆掻きを体験したことがきっかけで、県外から移住してきたという男性にも出会った。男性は、漆掻きの奥深さに魅了され、「この素晴らしい技術が無くなってしま

う」と危機感を覚えたという。都内に住む矢崎理事長も、漆掻き体験から立ち上がった一人。麗潤館は、大子漆の植栽や技術継承に取り組んでいる。

「ここにしかないもの」を実際に体験してもらうことで、新たな人材やアイデアを呼び込む。そんな「体験型」イベントのインパクトを最大限に活用していくことが、これからの県北振興の鍵になると実感した取材だった。（緒方優子）



漆掻きを体験する参加者ら 10月19日、大子町